

タイピー谷の「事実」と「虚構」

— Herman Melville の *Typee* —

平野温美*

(昭和61年9月29日受理)

The “Fact” and “Fiction” of *Typee Valley*

— A Study of Herman Melville’s *Typee* —

Harumi HIRANO

Typee was published in 1846 as a literally and completely factual piece of nonfiction. From the moment of publication, however, the problem of authenticity became an issue among some reviewers, although the general public received it as a real travelogue. Melville himself declares in his preface that he has stated the matters “just as they occurred” and desired “to speak the unvarnished truth.”

Today few read *Typee* as directly autobiographical, or as an authentic travel book. It is now considered as a fiction, a symbolically created thematic construct. Once it becomes a fiction, it allows various interpretations of what *Typee Valley* means. It is, therefore, necessary to return to the sifting of fact from fiction, so that we can see some of the indications of Melville’s imagination at work and of how he intended to create a world.

In this paper, the brief critical history concerning the question of authenticity is first reviewed. Then we consider the several levels of “truth” of the book; the autobiographical truth of the adventure of the novel, the ethnographic truth of the presentation of *Typee Valley*, and finally the truth of the author’s beliefs about *Typee Valley* and its people.

Melville の処女作 *Typee*¹⁾ は、1846年2月、ロンドンの出版者 John Murray の手によって、彼の “Colonial and Home Library” シリーズ中の一冊に加えられ、この世に出た。このシリーズは異郷における外国人の体験を専門としたものであったから、fiction は禁じられていた。*Typee* が本物の旅行記として扱われたのは勿論である。18日後にはアメリカの Wiley & Putnam 社からも出版され、一部のキリスト教関係者からの批判を別にすると、評判は高く、内容も概ね「事実」として受けとめられた。特に楽園のように理想的なタイピー谷が読者を魅了したと言ってよい²⁾。しかし今日では *Typee* は旅行記として読まれてはいない。Milton

* 北見工業大学一般教育等人文

Stern が言うように、*Typee* は象徴的なテーマを持つ作品であるという見方が定着しているからである³⁾。すなわち、fiction の部類に入っているのである。

しかし「事実」から「虚構」へ至る変化は、なぜか唐突で、切絶された感がある。また、いったん虚構と化すと、*Moby Dick* の白い巨大な鯨の正体をめぐる議論ほどでないにしろ、*Typee* についてさまざまな解釈が生れる可能性が生じることとなった。本稿ではまず、「事実」から「虚構」へ至った *Typee* 批評の変遷を、再度振り返って辿ってみる。そして次に作中の特にタイピー谷の描写の、どこが「事実」で、どこが「虚構」であるのか、両者の接点に作品をひき戻し、Melville の想像力の生れた現場のひとつを検証しておきたいというのが主旨である。

1

Typee は出版当時から実はその内容の信憑性 ‘authenticity’ が問題とされていた。以来、作品は「事実」と「虚構」の間を揺れ動いてきたと言っても過言ではない。当時内容の真偽を特に気にしたのは、他でもなく出版者の John Murray 自身で、彼は原稿を一読し、そこにはあってはならない “the taint of fiction”⁴⁾ を感じ取ったのである。更に、作品は初心者の作ではなく経験を積んだ作家の手になるものではないかとも疑った。彼は作品内容と作者の両方とも疑ったことになる。そこで弟の Herman に代りロンドンで Murray との交渉に当たっていた兄の Gansvoort Melville は、“adventurer, and the writer of the adventure are one & the same person” (Log, 199) であることを保証しなければならなかった。そもそもこの作品は『ロビンソン・クルソー』に比肩し得るものであるが、実話であるはずはなく (“it was impossible that it could be true” (Log, 196)) 従って価値はない、という理由で Harpers 社が出版を拒んだものであった。Murray は出版の条件として、もっと本当らしさを付与するためいくつかの章 (20, 21, 27 章) を加筆させたことが、Gansvoort の手紙で窺うことが出来る。出版者の態度は本の題名にも反影する。アメリカ版の題名は *Typee: A Peep at Polynesian Life. During a Four Months' Residence in a Valley of the Marquesas* で、主題名の *Typee* を Melville 自身は気に入っていたが、イギリス版は信頼できる旅行記としての印象を与えるためか、*Narrative of a Four Months' Residence Among the Natives of a Valley of the Marquesas Islands; or, A Peep at Polynesian Life* と詳述だが、谷の魅惑的な名前はない。

それでは Melville は信憑性についてどのように答えているだろうか。彼は序文で、もし作中に読者が不可解に思う記述があるなら、それは作者にとっても同様なことであったと言い、更に次のように続ける。すなわちきっぱりと “truth” であると明言している。

He has stated such matters just as they occurred, and leaves every one to form his own opinion concerning them; trusting that his anxious desire to speak the *unvarnished truth* will gain for him the confidence of his readers. (イタリックは筆者。 *Typee*, xiv)

出版してみると、大ていの読者は好意を持って迎えたが、いくつかの批評は Murray の心配通り内容の真正に強い疑いを示した。例えば4月17日付け *Morning Courier and New-York Enquirer* 紙は“in all essential respects, it is a fiction, — a piece of Munchausenism, — from beginning to end” (Log, 211) と言い切っている。こういう疑いの中で Melville にとって恰も救世主の如く現われたのが、彼と旅を共にし途中で行方不明となっていた Toby こと、Richard Tobias Greene である。彼は7月1日付け *Buffalo Commercial Advertiser* に名乗り出て、自分が Melville と一緒であった間については作品の正確なことを証明すると言明した。Melville がこれに大いに力づけられたことは想像に難くない。7月15日付けの Murray 宛の手紙の中で、次のイギリス版の改訂版にはアメリカ版と同じ題名を付けること、そしてそこに“Sequel of Toby”を載せることを提案している。ところが Toby の出現で Murray の疑いが消えたわけではなかった。8月3日付け Murray の返事は、改訂版についての提案を受諾したことと共に、Melville が確かにマルケサス諸島に滞在したことを証明する証拠書類を請求している。彼の疑いの根深さと、それに困惑した Melville (9月2日付け Murray 宛返書で“how indescribably vexatious”と表現している) が容易に想像できる出来事である。しかし信憑性の問題も、出版当時のことだけであった。次第にそのことも時と共に薄れ、Melville 自身世間から忘れられたような形で、1891年にこの世を去ってしまったのである。

今世紀に入り再び Melville が注目されるようになった時、事実は変化し、皮肉なことに *Typee* は逆にマルケサス諸島についての信頼すべき資料として甦ったのである。それは Sir James George Frazer が、その著書 *The Belief in Immortality and the Worship of the Dead* (1913) で、*Typee* をそういう資料として引用したことに代表されると言えよう。変化したのはこれだけではない。作者生存中 *Typee* は Melville の数ある作品の中で最もよく知られ、かつ最高の出来ばえとされていたが⁵⁾、今世紀でその順位も入れ替った。 *The Cambridge History of American Literature* (1917) が、Melville の最高傑作は *Moby Dick* であると認め、以後その評価は今日に至るまで支配的であるからだ。*Typee* は「旅行記」であるがため、文学作品としての評価が乏しく、それゆえ後方へ退いたと言えなくはない。F. O. Matthiessen も *Moby Dick* には多くのページを当てて論ずるが、*Typee* は“a record of experience”⁶⁾と片づけている。

しかし同時にこの作品が事実を扱った旅行記から、テーマを持つ虚構への急速な変貌も起こりつつあった。その嚆矢となったのは D. H. Lawrence であろう。彼は *Typee* の中に、白人文明人がもはや過去の楽園に戻ることを出来ない悲劇性を見たのである⁷⁾。後の批評の多くはこれを継承し、筆者は意見を異にするが、主人公が最後にタイピー谷から命がけの脱出をすることを作品のクライマックスとして捉え、作品は基本的に“a rejection of primitivism”⁸⁾を表明したものと見做す。となると、タイピーは人を誘う楽園であったものが、今や文明人にとっては自己成長あるいは identity 発見のために否定しなければならない所と化したことになる。

事実という重しを取りはずすと、タイピー谷は思わぬ方向へ漂ってゆきそうである。

2

Murray の抱いた疑いに再度戻ってみる。出版者の第六感で彼が臭ぎ取り払拭できなかった“the taint of fiction”とは何であったのか。作品の内容が“true”でないというのは、一体何に対してそうでなかったのか。第一に考えられるのは、Melville が実際にマルケサス諸島へ出かけ、タイピー谷に滞在したことがあるかという点である。第二に、タイピーにまつわる描写が民族学的見地から判断して事実であるかどうかが挙げられる。その上で考えなければならぬのは、Melville の作家としての“unvarnished truth”とは何であるかであろう。以下、この三点を順を追って検討してみる。

まず第一の Melville の実際の体験であるが、その後の研究が明らかにした事柄は次のようなものである。1841年1月3日、彼が乗った捕鯨船 Acushnet 号は Fairhaven を出航し、太平洋へ向かう。船の *Abstract Log* によると、船は Cape Horn を巡って南アメリカ大陸沿いに鯨を追いながら北上し、秋から冬にかけて Galapagos Islands を巡洋する。翌1842年6月23日、Nookaheva 島で錨を下ろす。同7月9日、Richard T. Greene と Herman Melville が“Nukehiva”で脱走したことが Stetson Certificate (Log, 130) として記録されている。Toby は先にアメリカの捕鯨船に乗るが、Melville は8月9日にオーストラリアの捕鯨船 Lucy Ann 号に乗船し契約したことが、船の crew list に残っている。その間の一カ月、彼が本当にタイピー谷に降りたのかについては Toby の証言がある。われわれが知り得るのは以上の事項である。

彼が島で船から脱走し、タイピー谷へ行き、そこから再び脱出して別の捕鯨船に乗ったのは確かなようだ。そしてその間の体験が作品の基礎となったのは勿論と言えよう。船の名が Acushnet 号から、作品では Dolly 号になり、仲間の船員たちが“so much superior in morale” (Gransvoort が Lemuel Shaw に宛てた1842年7月22日付け手紙の文中) であったらしいのに、作品では“parcel of dastardly and mean spirited wretches”となったこと、また島で錨を下ろした日は実際は“squally”であったが、作品では島民の男女が果物をカヌーで、あるいは泳いで船まで運ぶというのどかな風景となっていることなどは、全体の構成の中で意味を持つ以外は、とりたてて“the taint of fiction”と批難すべきものでないかも知れない。それよりもここで最も注目すべき変化として指摘したいのは、四週間ほどの滞在が、四倍の四カ月になったことである。この点に関しては Melville も気にしていたのだろう、序文で次のような言い訳をしている。

In very many published narratives no little degree of attention is bestowed upon dates; but as *the author lost all knowledge of the days of the week*, during the occurrence of the scenes herein related, he hopes that the reader will charitably pass over his shortcomings in this particular. (イタリックは筆者。Typee, xiv)

作中の主人公であるが、奇妙なことに彼の本当の名前は一度も言及されず、ただ谷では Tommo という仮の名前で呼ばれることになる。作者と主人公は勿論同一ではない。さてこの主人公は四カ月をタイピー谷で過すが、この期間は三つの時期に区分される。まず最初の一カ月、彼は島民に対する恐怖、すなわち自分が彼らのカニバリズムの犠牲者になるのではないかという脅迫に悩まされる(10章—16章)。次に続く二カ月間は一変して恐怖は消え、谷の生活に溶けこんでゆく(17章—31章)。タイピーに関する民族学的観察及び考察がされるのは、この時期である。そして最後の一カ月間は最初の一カ月と同じ心境が語られ、島民への不信は以前に増して募り、ついに最終章で脱出することになる(32章—34章)。見方を変えると四カ月ははっきりと明暗に二分されるのがわかる⁹⁾。このうち主人公が作者と同様に「月日のたつのも忘れた」のは、中間の二カ月である。前後の暗い日々を語る時の主人公は、その都度日数の経過を読者に伝えるが、楽しい幸福な時期は次のように始まるからである。

DAY AFTER DAY wore on, and still there was no perceptible change in the conduct of the islanders towards me. Gradually I lost all knowledge of the regular recurrence of the days of the week, and sunk insensibly into that kind of apathy which ensues after some violent outbreak of despair. My limb suddenly healed, the swelling went down, the pain subsided, and I had every reason to suppose I should soon completely recover from the affliction that had so long tormented me. (イタリックは筆者。Typee, 123)

四週間が四カ月に膨んだ理由のひとつは、この時期を語る目的のためであったと言えよう。本題の「事実」と「虚構」の問題を、この膨んだ月日にまず焦点を合わせてみるのが妥当と思われる。というのも Melville が主人公をタイピー人の視点に立たせてタイピーを語らせているのがここであるからだ。そこで第二の問題、すなわち民族学的見地から見て、Melville が描くタイピーは事実であるかという点に移ってゆくことにする。

3

19世紀前半当時のタイピー谷を、今ここでわれわれが検証することは不可能であるし、またそれは民族学や文化人類学の分野であろう。しかし幸いなことに、Melville の実際の体験と作品、そして参考文献などが、1930年代に詳しく研究された。特に Charles Roberts Anderson の *Melville in the South Seas* (1939) は貴重で有効な資料である¹⁰⁾。ここでは Anderson の研究を信頼し、それを辿ってみることにする。

Anderson に従って結論を簡単に言えば、Melville のタイピー叙述は民族学的に「事実」であった。しかし同時に、描かれている事柄が実際の彼の体験に基づいているかについては、答えは否定的になる。というのは、作品を書くに当り、彼は当時既に出版されていたいくつかの旅行記を大いに参考にしたからである。Typee 冒頭の章で、彼はマルケサス諸島についての資料に言及し、特に注目すべきものとして、Captain David Porter の *Journal of a Cruise*

Made to the Pacific Ocean と、C. S. Stewart の *A Visit to the South Seas* を挙げる。Porter についてはすぐあとで、その本は一度も見たことがないと言い、Stewart については読んだことは否定しないが、作者についてはわずかに二週間だけ島に滞在し、それも夜は必ず船に泊り、昼間だけ護衛つきで上品な小旅行を行ったにすぎないと評し、その取材方法を批判する旨を述べている。また直後にこれら“learned tourists”がいかに不正確な情報を集めているかを具体的に説明する。というのは彼ら研究者は現地の言葉を知らないで、情報提供者としても水夫の“South Sea rovers”を雇うことになる。ところが彼らもまたほんの僅かの言葉と知識しか持ち合わせていないのだが、もと水夫というのはホラ吹きが得意であるため、相手が喜びそうなことは嘘でも何でもさも知った振りをして話すというわけである。Melville が伝えんとするのは、*Typee* はこういった類の情報によって書かれたものではなく、作者自身の四カ月の体験に基づき信頼すべき内容であることの宣言と言ってよい。

ところが、Anderson が解明してくれるのは、Melville は他でもなく彼が非難する旅行記一般に深く負って本を書いたという「事実」であった。Melville 自身が当時の南海の放浪者のひとりでしかなかったからだ。そして先に述べた Porter と Stewart の二冊に彼は最も多くを参照し参考にしたのである。その他利用した資料として挙げられるのは、Ellis の *Polynesian Researches*, Langsdorff の *Voyages and Travels*, Bennett の *Narrative of a Whaling Voyage*, Coulter の *Adventures in the Pacific* その他である。例えばタイピー谷の特長のひとつは、島民の美しい身体についてであるが、この点は Langsdorff が既に確認した事であったし、男性の立派な体格については Porter が同様のことを述べているという指摘。女性の化粧については殆ど Stewart からの引用であること。Noble Savage の代表者である Mehevi の正装した姿の描写は、Stewart が Hapa 族を描いたものを利用し、その上で Porter の記述で補っていることなどを、実際の文章を引用して Anderson は証明してくれる。こうしてみると、Melville が描いた殆どの事柄については既に出版された「原典」が見つかると言ってよい。彼独自の体験らしく思われるのは、わずかに食物についてと祭りに関する記述ぐらいのものである。しかしそれだけならば、彼は体験した事柄について記憶を甦らせるための手段として他人の資料を参考にしたと言えなくもない。ところが彼が他人の資料をそれ以上に頼んだことを皮肉なまでに証明する叙述があると Anderson は指摘する。それはタイピーの最高神であるという Moa-Artua の描写で、次に Melville と Porter の文章を並べて引用してみる。この小さな木偶の神は、*Moby Dick* で Queequeg の持つ Yojo と絡がるが、*Typee* では 24 章で祭司 Kolory が持って登場する。

His martial grace very often carried about with him what seemed to me the half of a broken war-club. It was swathed round with ragged bits of white tappa, and the upper part, which was intended to represent a human head, was embellished with a strip of scarlet cloth of European manufacture. It required little observa-

tion to discover that this strange object was revered as a god.... In fact, this funny little image was the “crack” god of the island; lording it over all the wooden lubbers who looked so grim and dreadful; its name was Moa Artua. (*Typee*, 174-75)

I was surprised to find him [their greatest of all gods] only a parcel of paper cloth secured to a piece of a spear about four feet long; it in some measure resembled a child in swaddling cloths, and the part intended to represent the head had a number of strips of cloth hanging from it about a foot in length; I could not help laughing at the ridiculous appearance of the god they worshipped. (Anderson, 172)

両者が同じような対象を同じ印象を抱いて書いたのは明白である。次にこの最高神にまつわる儀式をそれぞれ詳しく語るが、Melville のより具体的な説明に対し、Porter は大まかである。儀式の方法に異なる点はあるが、両方とも神をあたかも人形遊びをするかのように島民が扱っていることで一致する。

The whole of these proceedings were like those of a parcel of children playing with dolls and baby houses. (*Typee*, 176)

In religion these people are mere children; their morais are their babyhouses, and their gods are their dolls. (Anderson, 173)

この神については Stewart も手短かに紹介し、儀式については Porter と同じ内容を簡潔に述べている。

さて Anderson が最も信頼し得る民族学的資料として挙げるのは、1920年9月21日から、翌1921年6月21日まで行われた Bayard Dominick Expedition による研究報告である。この調査では民族学者、文化人類学者、考古学者らがマルケサス諸島に滞在し、島の過去から当時に至る文化の詳しい研究が行われた。この調査報告によると、先程引用した Porter, Stewart, Melville に共通する小さな偶像と、その宗教儀式がマルケサスに存在した証拠はないというものであった。その時の研究者 E. S. C. Handy は、この点についての Melville の描写は “questionable authenticity” (Anderson, 173) と疑っている。これが正しいとすると、三人が偶然に存在しない神と儀式について書き記したことはあり得ないから、順序からいって Stewart と Melville が Porter の誤った報告を書き写したことになる。Porter が誤ったのは仲介をした Wilson という通訳の無知のためとなる。Melville と先人たちの旅行記の内容が一致し、しかも現実の出来事であれば、Melville は彼らを参考にしたままでと言えなくはないが、実在しない事柄においても一致するとなれば、はなしは別である。Melville の「剽窃」は明白になる。

しかしながら、不正確な点は幾つかあるものの、作中のタイピーの民族学的信憑性について、Anderson は次のような結論を下す。

Without hesitation it can be said that in general this volume presents a faithful delineation of island life and scenery in precivilization Nukahiva, with the exception of numerous embellishments and some minor errors. (Anderson, 190)

しかしこれだけでは答えは充分ではない。Melville が僅か一カ月足らずの滞在でこれほど深く詳細な情報を集めたわけでないことを付け加えておかねばならない。Anderson は次のように言い切っている。

Indeed, it can be said almost without exaggeration that, with these sources open before him and with a lively imagination to body them forth, Melville might have written *Typee* without ever having seen the Marquesas Islands. (Anderson, 191)

現地を見ずとも書けたであろうというのは勿論仮定のはなしだが、この言い方の伝えるものは明らかである。しかも *Typee* の内容が大概「事実」であるならば、Murray の抱いた疑いは、結局は取越苦勞の部類に入り、作品はやはり体験 (Melville のそれだけでなくとも) の記録に近いものと言えるのだろうか。しかしそれは事の半分、いや表面でしかないことを次に述べてみる。

4

Melville にとっての“truth”とは、今まで述べてきた事実関係に対応するのであろうか。もう少し Anderson を参考にしてみる。Anderson は *Typee* の「事実」を調べたあと、Melville は実は“poetic travel book”¹¹⁾を書いたのであって、重要なのは事実よりも、むしろ“varnish”された部分であるという示唆に富む発言をしている。すなわち事実よりも誇張や粉飾した部分に、かえって本音があるのではないかという指摘である。そこから Anderson が導き出したのは次の二点で、まず *Typee* は Noble Savage をロマンティックに描くことを目的とし、これが作品のテーマとなっていること。二つめはカニバリズムの恐怖が全編を通じて繰り返し強調され、これが物語のサスペンスとなり、作品の構成の役割を果していること。これらを文学批評の立場で見ると、最終の脱出の場面の混乱で示されるように、テーマと構成の矛盾が互いの効果を相殺し、統一がとれなくなっているというのが結論である。

しかしこの解釈は正しくない。「事実」に照らしてみても Melville の誇張や粉飾が先の二点であることは同意できるが、この二点は同時進行ではないからである。片方が強調される時は、片方は影を潜ませる。ここで問題にしているのは、四カ月のうちの中二カ月であるが、この間にはカニバリズムの恐怖は一度も示されないのが特徴であり、主人公がその恐怖に襲われるのは前後の各一カ月の間のみであることは特に注目しておかねばならない。中二カ月における主人公は反対に島のカニバリズムの慣習を弁護するのである。カニバリズムは敵に対し復讐の情念を満足させるだけのもので、ヨーロッパにおける残酷な刑罰や戦争を引き合いにすると、むしろヨーロッパの方が残酷非道であり“civilized barbarity” (*Typee*, 125) の名に価すると言

う。それでは「月日のたつのも忘れ」で暮した主人公が観察したタイビーは、一体どういう所であったか。それが作者 Melville の“truth”ではなかろうか。

一言で言うと、それは人間事象のうち一切の「悪」を抜き取ったものであった。次の引用は幾人かの批評家が Melville の詩的風景を表わすところとした、死んだ酋長の霊廟の場面である。しかし以下の長い文章は *Typee* からの引用ではなく、もとの Porter の文章であり、Melville の“dead chief”はここでは Taiohaë 族の priest である。次を読むと、Melville がいかに「事実」から遠く飛翔したかは歴然とする (Cf. *Typee*, 172-73)。

On the right of this grove, distant only a few paces, were four splendid war canoes, furnished with their outriggers and decorated with ornaments of human hair, coral shells, &c. with an abundance of white streamers; their heads were placed toward the mountain, and in the stern of each was a figure of a man with a paddle steering, in full dress, ornamented with plumes, earrings made to represent those formed of whales' teeth, and every other ornament of the fashion of the country. One of the canoes was more splendid than the others, and was situated nearer the grove. I inquired who the dignified personage might be who was seated in her stern, and was informed that this was the priest who had been killed, not long since by the Happahs [Hapas]. The stench here was intolerable from the number of offerings which had been made, but; attracted by curiosity, I went to examine the canoes more minutely, and found the bodies of two of the Typees, whom we had killed, in a bloated state lying in the bottom of that of the priest, and many other human carcasses, with the flesh still on them, lying about the canoe. The other canoes, they informed me, belonged to different warriors who had been killed, or died not long since. I asked them why they had placed their effigies in the canoes, and also why they put the bodies of the dead Typees in that of the priest; they told me (as Wilson interpreted) that they were going to heaven, and that it was impossible to get there without canoes. ...I endeavoured to ascertain whether they had an idea of a future state, rewards and punishments, and the nature of their heaven. As respects the latter article, they believed it to be an island, somewhere in the sky, abounding with everything desirable; that those killed in war and carried off by their friends go there, provided they are furnished with a canoe and provisions, but that those who are carried off by the enemy, never reach it unless a sufficient number of the enemy can be obtained to paddle his canoe there, and for this reason they were so anxious to procure a crew for their priest, who was killed and carried off by the Happahs. They have neither rewards nor punishments in this world, and I could not learn that they expected any in the next. (Anderson, 176-77)

Melville の描写が読者に伝える静寂と安らぎと、主人公を魅了した詩的幻想はここには無い。しかも誰が読んでも同じ対象を描いていることは明白である。Melville は Porter が遠くから見たものだけ借用し、近くで観察したことや踏み込んで尋ねた部分は全て省略してしまった。Porter の文章には非常に現実的で生々しい人々の実体が浮かび上る。島の特徴である部族間

の激しい憎しみの理由が、「制度化」された宗教的必要性であるという説明がここに視覚的になされている。一方 Melville は、部族間の争いの原因は不明であると言い、ただ同族内に憎しみを持つより良いではないかと軽く去なしているだけである。それよりも彼は谷の人々の平和で安楽な生活に注目し、彼らから陰惨な要素をすべて除いてしまった。だから「事実」を曲げたところではなく、「事実」から削り落したところに彼の文学的“truth”が見えると言ってよいだろう。

これに関連して次に指摘されるのは、タイピーには「死」にまつわる要素が皆無であるということである。谷には怪我人もおらず、病人もいない。勿論死者も出てこない。更に言えば、谷には死者を埋葬する場所さえ見つからなかったと主人公は言う。しかしこれは Melville の意図的な排除であることは、島の至るところに見られる大小の石造りの高台 stone platforms (pi-pis) の説明の矛盾から明らかである。これらの高台は、島民の住居や部族の神聖な建物の土台となっているのだが、これらの石造りのうち、谷の奥まった所や山の上にある異常に大規模なものが、“me'œ” (Melville は Porter にならって“morais”と呼ぶ) で、これが埋葬場所となる。このことは 1920 年、Ralph Linton によって裏づけられている。Melville もこのことを承知していて、島全体に共通することを紹介する。そして主人公自身が「ストーンヘンジ」や「ドルイドの遺跡」を想起する巨大な石造りの高台を目撃し、その詳細な記述をする (*Typee*, 154)。にもかかわらず、タイピーには埋葬場所のありそうなところは見えなかったと二度繰り返し、その理由を次のように想像する。

I have since thought it probable, however, that the Typees either desirous of removing from their sight the evidences of mortality, or prompted by a taste for rural beauty, may have some charming cemetery situated in the shadowy recesses along the base of the mountains. (*Typee*, 193)

ここにはからずも作者自身の意図が露われている。“Evidences of mortality”を隠しておきたいという意図である。死者、葬儀、埋葬場所について Melville は一通りの紹介をするが、それはタイピー谷での出来事ではなく、Nukuheva で目撃したことになっている。作品全体から見てこれは無理な設定と言えよう。しかし民族学的に必要な描写であっても作品のテーマに抵触せぬ配慮が巧妙にされていると言ってよい。

石造りの高台をめぐる Melville の説明には、更に別の彼の意図が読みとれる。島の石造りの技術は今日でも興味を残すものだが、Porter は島民が彼の重い大砲 (a six pounder) を高く険しい山の頂上へ運ぶという驚ろくべき技術を目のあたりにし、遠い石切り場から石を運ぶ技術を確認している。また Linton は、島民がてこを使う技術を見て、現在の島民と同じ人々がこれらの高台を構築し、また高台も大して古いものではないことを確認した。ところが Melville はタイピー人の石造りの技術について、これを無視したのみならず、積極的に否定さえしようとする。まず Kory-Kory にこれら石の高台は宇宙創造と同時に偉大な神々が造ったと言わせ

(*Typee*, 150), その上で主人公が考えるのは、島には古い歴史があって現在のタイピー人ではない、別の先住民がいたという仮想である。

I gazed upon this monument, doubtless the work of an extinct and forgotten race. (*Typee*, 155)

すなわち今の単純なタイピー人には巨大な石を動かし、運び、積み上げて、固定させる技術もないし、道具もないというわけである。これは単なる Melville の思いつきにしては奇妙すぎる。むしろ、故意に「驚嘆すべき技術」を彼らから抹消しなければならなかった理由があったと言うべきであろう。それはタイピー人から現代の文明人への道を連想させるような技術及び知性の一切を奪い取るということではなかろうか。彼らはこういう高度な技術を身につける必要性や必然性からも無縁なままで、しかも何不足なく幸福に生活していること、そういうタイピー人を描こうとしたのではないか。

技術の発達そして継承は、必然的にもうひとつの重要な概念を伴なう。それは「時」の概念である。技術を持たなかった遠い昔から、今日の高度の技術を獲得するに至った歴大な時間の流れ、すなわち歴史感覚を、人は否応無く考えなければならない。その流れは過去から現在へと至り、次に「西洋文明」というタイピーにとっての「未来」へと合流すると考えられるところのものである。そういった必然の流れを連想し、肯定する一切のものからタイピーを切り離しておきたいという強い意図が Melville の中にあったのではないか。高度な石造りの技術をタイピー人とは別の人種のせいとしておきたいのは、彼の作品化するための一種の“poetic licence”であったのだろう。タイピーは「時」の枠外にある人々の住む世界なのだ。だからこそ作者はその間の「曜日の知識を失った」のであり、主人公もまた「めぐりゆく曜日の知識をすべて失った」のも当然といえる。

John Murray が感じた“the taint of fiction”と、Melville の言う“the unvarnished truth”とを結ぶ道は単純ではない。Anderson の研究によって、Melville は民族学的には「事実」に基づくタイピーを描いたことは確かめられた。しかしその表層をめぐってみると、そこに露になるのは「時」の経緯から解き放たれた、ひとつの幻想的世界である。現実のタイピーから彼が削ぎ取ったものは、その反対の意味を際立たせる効果を持つ。残酷な行為と無縁なタイピーには、絶えることのない陽気な気分と幸福感が漲っている。人々は病や死の恐れに脅かされることなく、永遠に豊かな自然の中で、心配も悲しみもなく毎日を過す。人々の美しいそして健康な肉体と、女性の抑制されない自由な振舞いは、タイピーが「生」が輝き横溢する楽園そのものであることを、われわれに確かに伝える。技術や知識からも無縁なタイピー人の中には、意見の相違といったこともあり得ず、人々は同じように感じ、同じように感情を表現する。従って争い事もなく、万事は親しさと協調精神で取り行われている。人々を律する法はないが、彼らは本来的に身に具っている美德によって互いに接するため、文明社会には見られない調和のとれた社会が実現することになる。

Melville は現実のタイピーをいわばひとつの素材にしなが、そして表面は紀行文を装いながら、実は大洋に浮かぶ遠い島の、そのまた隔離されたひとつの谷に、ある理想的な楽園を委ねた。現実世界が常にさらされている数多くの悪や苦痛、そして悲しみからまぬがれた、それは神話の世界なのである。そして外から侵入する破壊者さえいなかったなら、永遠に続く楽園であった。かくしてタイピーは「事実」の次元から、「虚構」の世界へと浮上するのである。

注

- 1) テキストは Herman Melville, *Typee: A Peep at Polynesian Life*, ed. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle (Evanston, Ill.: Northwestern Univ. Press, 1968) による。同書からの引用は題名とページ数を本文中に印す。
- 2) 例えば John Sullivan Dwight は 1846 年 4 月 4 日付 *Brook Farm Harbinger* で、理想的なタイピー社会を賛え、19 世紀の指導者はここから学ぶべきであると述べている。
- 3) Milton R. Stern, *The Fine Hammered Steel of Herman Melville* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1957), p. 34.
- 4) Jay Leyda, *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville, 1819-1891* (1951; rpt. New York: Gordian Press, 1969), I, 200. 以後同書からの引用は題名とページ数を本文中に印す。
- 5) 1891 年 9 月 29 日付 *New-York Daily Tribune* に載った Melville の死亡広告記事には “He won considerable fame as an author by the publication of a book in 1847 entitled ‘Typee’ ... This was his best work” とある (*Log*, II, 837)。
- 6) F. O. Matthiessen, *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman* (New York and London: Oxford Univ. Press, 1941), p. 371.
- 7) D. H. Lawrence, “Herman Melville’s *Typee* and *Omoo*,” in *Studies in Classic American Literature* (1920; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1971), pp. 139-52.
- 8) Faith Pullin, “Melville’s *Typee*: The Failure of Eden,” in *New Perspectives on Melville*, ed. Faith Pullin (Edinburgh: Univ. Press, 1978), p. 1.
- 9) William B. Dillingham, *An Artist in the Rigging: The Early Work of Herman Melville* (Athens: Univ. of Georgia Press, 1972), pp. 9-30 参照。Dillingham は谷に滞在当時の Melville と、谷を去って数年を経た Melville との視点の相違であると興味ある指摘をする。
- 10) Charles Roberts Anderson, *Melville in the South Seas* (New York: Columbia Univ. Press, 1939), pp. 117-95. 本書からの引用は作者とページ数を本文中に印す。
- 11) Anderson, “Melville’s South Sea Romance,” in 『英語青年』(東京: 研究社, 1969), p. 481.